

相

心と相

「念仏申しつゝ、おらんようになろう。」
念仏して居ないようになる。こうしたことを本部の者に話してから後、このことがいつも色々な事の上に憶われる。

「心」は相を持たない。しかし、その相のないかの心が、一一相を取つてあらわれる。心がいかなる状態であるかは、それをしばらくその為すがままにしておけばわかる。

貪欲に貪欲の相あり、瞋恚に瞋恚の相あり、愚痴に愚痴の相あり、信心に信心の相あり、歡喜は歡喜の相となる。衆生無明三毒の相を、「相を取る」と言われ、仏菩薩の相を「無相」と言われる。菩薩の境界を「空、無相、無願三昧を得たり」と言われる。

雑毒食

『大智度論』卷第六十一には

「是の故に菩薩摩訶薩、諸の善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんと欲すれば、得有る應らず、相を取る應らず。是の如き廻向、もし有得取相の廻向は、諸仏大利益有るを説かず。何を以ての故に、是の廻向は雑毒なるが故なり。譬へば、美食に毒雑ふれば、好色好香あり、人の為に貪らると雖、而も雑毒なり、愚痴之人これを食して歡喜し、其の好色香美を貪りて口にす可きも、飯消せんと欲する時、若しは死、若しは死等の苦を受くるが如し。」

以上は隨喜廻向品第三十九の中の一節であるが、この品の中にはまことに非常にたびたび「取相」の廻向を戒めてある。そしてこれを「雑毒食」と譬えてある。

前の文において「有得取相」と言われたのは、相を取るのには、有得、即ち「有所得」として、そこに貪欲の動き、功利的な心の動きがあるが故であろう。

「得法には終に正しき廻向なし、何を以ての故に、是の得法は雑毒なればなり。」

相を取るのには毒がまじるが故である。凡夫二乗の一切の善は、必ず雑毒虚仮であるが故に、雑毒海と言われるのである。

しかるに、般若波羅蜜によれば眞実の隨喜廻向を成就することを説かれたもの、即ちこの『智度論』である。

「凡夫人心剛強不能行是法」ご凡夫の心は「剛強」である。剛強とは曇鸞大師の言では強梁である。このかたくて強い心が邪見憍慢で、悪心のままを強く通そうとするのである。かかる一切衆生は以何にして救われるのであるか。

不随仏法

眞実の信心歡喜には、「取相」はない。本仏の尽十方無碍の智慧光に攝取されて、限りなき否定に生きるが故である。この信心歡喜が念仏となって相續する時、仏凡一体の妙境を顕すが、そこには「得」たという相はない。その信心相續して、大法を心の

食とし、念々称名常懺悔を精進と言われるが、もし一度精進が、一転して、享楽となり、道楽となり、あるいは、他の人を凌しのがが為の競争となれば、そこには名利の恐るべき相を取る。『智度論』には、

「是の得法は雑毒にして、有相、有動、有戲論なり。もし是の如き廻向は則ち仏を謗るとなし、佛教に随はず、法説に随はずとなす。」

とあり、もし我を出して、み法を戲論あそびごとにすれば、仏法を信ずるに似て、仏を謗り、法を誹ることになって、不随仏教、不随法説となるのである。取相の如何に恐るべきかを知るべきである。

慚愧と歡喜

寒き冬の夜には、一切の水は氷結して硬い相を取る。衆生は、世間の業風に吹かれて、三毒の煩惱の水となって相を取るのである。如来の大悲光明は、内にこの衆生の疑惑を破り、三毒の水を照破して、智慧の火によって溶かしつつ、限りなき慚愧の世界に入らしめたものである。衆生は、慚愧によるより外に、相を超えることは出来ない。

御本典信巻に云く、

「涅槃經に言く……諸仏世尊常に是の言を説きたまはく、二の白法有り、能く衆生を救う、一つには慚、二には愧なり。」と。

これを説きたもうて後、阿闍世の父の殺害に対する地獄の報いを説きたもう時に、「大王譬へば涅槃は有に非ず無に非ず、而も亦是れ有なるが如し、殺も亦是の如し、2有に非ず無に非ずと雖、而も亦是れ有なり、慚愧之人は則ち『有に非ず』と為す。無慚愧の者は則ち『無に非ず』と為す。果報を受くる者は、これを名けて『有』と為す。」と。

慚愧は氷が春風にあつて解けるが如き相である。如来の大悲光明に摂取されて、無根の信心を成就して、如来を恭敬し、法、僧を信ずる者の無相の相である。

慚愧はまたやがて感謝であり、歡喜である。信心歡喜は、よく衆生の強梁なる心を柔軟ならしめて、相を融かすのである。大信海は円融そのものである。無相である。

念仏一道に精進しなければならぬ。不断の求道と内観によつてのみ、よく「相」を消されて、如来淨華の衆となり得るであろう。

念仏の年月重なりて、その一挙手一投足、念仏三昧になりきる時、法界における一番美しき相となるであろう。